

メルロ＝ポンティの哲学に断絶はあるのか？
——メルロ＝ポンティの表現論研究の比較検討——

Is there a Rupture in Merleau-Ponty's Philosophy?
— An examination of secondary literature
on Merleau-Ponty's theory of expression —

田中 雄祐
TANAKA, Yusuke

岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要
第46号 2018年11月 抜刷
Journal of Humanities and Social Sciences
Okayama University Vol.46 2018

メルロ＝ポンティの哲学に断絶はあるのか？ ——メルロ＝ポンティの表現論研究の比較検討——

田中雄祐*

はじめに

『知覚の現象学』(1945年)と死後に出版された遺稿『見えるものと見えないもの』(1964年)との関係をどのように解釈するかはメルロ＝ポンティ研究においてしばしば問題にされてきた。この問題に対して、ルノー・バルバラス(Barbaras 1991, 1993)は『知覚の現象学』から『見えるものと見えないもの』へと移行していく過程において、鍵となるのが1950年代の表現論であると主張する。

私たちが示したいのは、表現の問題は、理念性の土壌として、ある意味では『知覚の現象学』の盲点を提示しており、結果としてそこにおいて存在論への移行が行われる特権的な場所であるということだ。(Barbaras 1993: 61)

要するに、バルバラスは『知覚の現象学』においても表現と言語の問題が主題の一つとして扱われていたが、そこには重大な盲点や欠陥があり、その欠陥を見直す過程において表現や言語の現象の研究が行われ、その結果として存在論への移行が起こった、とするのである。それゆえに、バルバラスによれば、1950年代の知覚から表現への移行によってメルロ＝ポンティの哲学にはある種の断絶が生じたということになるだろう。

一方で、ドナルド・ランデス(Landes 2013)は、メルロ＝ポンティの哲学において上記のような展開が起こったとは考えない。

メルロ＝ポンティは(1950年代の始めまでに)自らの表現についての探求の射程が哲学そのものと同じくらい広いということを、そして、おそらく自らの初期の知覚への集中が経験の深層の神秘へと接近することを妨げていたということを、すなわち知覚さえも表現であるということを認識する。かくして、彼の表現への〈転回(turn)〉は1950年代中ごろに突然起こり、後になって存在論のために捨てられたものへの〈転回〉ではない。(Landes 2013: 9)

* 岡山大学大学院社会文化科学研究科博士後期課程

ランダスもまた、バルパラスと同様に1950年代になってメルロ＝ポンティが表現に注目するようになった点に着目するのではあるが、それがきっかけとなって新たな方向へと哲学が展開されていったとは考えない。むしろ、初期の著作においても発見していたにもかかわらず、十分に認識できていなかった表現の探求の射程と有効性に気づいただけである、とするのである。以上のように、1950年代における表現論への移行を断絶とするか、継続とするかはという問題をめぐっては両研究者の間に対立があるように思われる。

本稿では、先行研究の比較検討を通じて、このような対立がメルロ＝ポンティの表現論に対する視点の違いにあることを明らかにする。すなわち、一方で、メルロ＝ポンティは、表現を「表現のパラドックス」という特徴を持つ行為として捉えていた。この点において、メルロ＝ポンティの表現論に根本的な変化はない。他方で、表現と表現される意味や真理との関係を考慮したときに、メルロ＝ポンティの表現論には大きな変化があると言えるのである。

本稿の構成は以下のようなものとなる。まず、1節では、表現を「表現のパラドックス」という特徴を備えた行為であるとする研究を整理し、次に2節で表現論の断絶を主張する研究を整理する。最後に、まとめと今後の展望について述べる。

1. 表現のパラドックス

メルロ＝ポンティは「間接的言語と沈黙の声」(1952年)において、「いっさいの知覚、知覚を前提とするいっさいの行為、つまり、人間が身体を使う行為はみな、すでに、本源的な表現なのである」(S: 108/102)と述べており、知覚を含めた人間の行為全般にこの特徴が見出されると考えているのである。そして、このような人間の行為としての表現が持つ特徴は「表現のパラドックス」と呼ばれる。

そこで、以下ではベルンハルト・ヴァルデンフェルス (Waldenfels 1998) とランダス (Landes 2013) による「表現のパラドックス」の定義を確認し (1.1, 1.2)、次にランダスによるソーシャルの影響を受ける前後の著作の解釈を再構成することで、ランダスがどちらの時期の著作にも「表現のパラドックス」を共通して見出していることを見る (1.3)。

1.1. ヴァルデンフェルスによる定義

ヴァルデンフェルスをはじめとしてメルロ＝ポンティ研究者の多くが、メルロ＝ポンティの表現を純粋な創造と純粋な反復 (再生産) の間にあるものとして捉えている¹。すなわち、表現とはあらかじめ存在している思惟や意味のような観念を記号へと翻訳する純粋な再生産ではないが、全くの

¹ ヴァルデンフェルスやランダスの他には、ハリー・アダムス (Adams 2008)、ローレンス・ハス (Hass 2008)、デイヴィッド・モリス (Morris 2004)、円谷裕二 (円谷 2014) などの研究を参照せよ。

無から新たな意味を創造する純粋な創造でもないのである²。

ヴァルデンフェルス (Waldenfels 1998) は、この表現が持つ再生産と創造の間の緊張関係を「表現のパラドックス」と呼び、それを以下のような〈逸脱、隔たり〉、〈翻訳〉、〈事後性〉、〈超過〉の四つ概念によって規定している。

〈逸脱、隔たり〉

ヴァルデンフェルスによれば、創造は「一貫した変形」という形で表現のある水準からの逸脱によって行われ、「表現作用は、この逸脱が与えられた枠内に留まるか、あるいはその枠を変容し破碎するかに応じて、相対的な新しさと相対的な古さとの間を揺れ動く」(Waldenfels 1998 : 340/457)ものである。要するに、新たなものの創出は、古いものを基準とし、その変容によって行われるのである。

〈翻訳〉

ヴァルデンフェルスは、表現が「表現されるものに全面的に負っている」とすれば、表現は「創造的な表現」ではなくなってしまう、逆に表現が「表現されるものに全く負うところのない創造」だとすれば、もはや「創造的な表現」ではなくなってしまうという(Waldenfels 1998 : 341/458-459)。表現は前もって存在する原本を翻訳しただけでもなければ、原本を忘れさせるようなものでもないのである³。

〈事後性〉

ヴァルデンフェルスは、表現行為は「それ自身を先取りしており [...] 自分自身に先立ち自分自身よりも古い」(Waldenfels 1998 : 342/459) と述べている。つまり、表現されるものが、表現以前に存在しているとすれば、表現行為は創造的なものではなくなってしまう。ゆえに、表現されるものは、表現によって現れるのであり、表現行為以前には存在していないのである。

〈超過〉

ヴァルデンフェルスは、表現行為は「自らを先取りすることによってしか成立しないし、自身に遅れてもいる」という(Waldenfels 1998 : 342/460)。表現されるものは、表現しようとしていたも

² 例えば、アダムスは次のように述べている。「メルロ＝ポンティは、私たちに表現を単に創造的過程とみなさないように警告している。まるで表現が完全に新たな意味を自発的に産出できるかのよう。むしろ、表現は既に表現されたものの再生産と新たな意味の創造の間になければならない。」(Adams 2008 : 156)

³ モリスによれば、ヴァルデンフェルスの言う意味での〈翻訳〉においては「〈原本〉が書かれるのは、〈翻訳〉されることによるのみである」(Morris 2004 : 83)。

のを常に超過しており、完全に言い尽くされた表現というものは存在しないのである⁴。

1.2. ランデスによる定義

ランデスもまた、ヴァルデンフェルスと同様に、表現は「表現のパラドックス」という特徴を持つ行為であると考えている⁵。ランデスによる「表現」の定義は次のようなものである。

表現とは、広く解釈すれば、過去の負荷 (weight)、理念的なものの負荷、現在の状況の負荷に対するあらゆる永続的な応答のことである。そのようなものとして、現象学的に考察される時、表現は身体化された行為として、常に純粋な反復と純粋な創造の間にある諸実行の道程 (trajectory of performances) とかみ合う行為として経験される。表現されるものが存在するのは、それが捉え直される (あるいは捉え直され得た) 場合だけであり、各々の表現は永遠に自身から溢れ出て、創造的反復という開かれた未来へと向って行く [...]。(Landes 2013 : 10)

ここで「負荷」と呼ばれているものは、私の身体の生理学的可能性、習得済みの表現的習慣あるいは技術のような物理的なものや私の過去、私の歴史、他者の現前、私の文化の構造や痕跡、最も深層にあり、最も儂い欲望のような理念的なものなどを広く指す (Landes 2013 : 10)。この負荷が私の身体の表現作用の可能性を制約すると同時に、私や他の身体に対して捉え直し (taking up) という応答を、要するに新たな表現を行うように促す。

このとき、表現は「創造的反復」として、すなわち〈純粋な反復〉と〈純粋な創造〉、〈決定論〉と〈自発性〉の間にあるものとして捉えられている。「表現」は、思惟のようなあらかじめ存在しているものを、外部に表明するのではないが、反対に「負荷」から解き放たれて全く自由に表現行為を行うということもできない。さらにランデスが注目するのは『知覚の現象学』(1945年)の次

⁴ ローレンス・ハス (Hass 2008) は、『知覚の現象学』の「コギト」章の数学的真理の説明においてはじめて表現という概念が明確化されたという (Hass 2008 : 148)。ここで、メルロ＝ポンティは、幾何学の証明を以下の三つの特徴を持つ表現行為として捉えている。

(1) 例えば、三角形の図形を用いて証明を行うとき、証明は最初の図形ですでに与えられていたのを改めて言い直す演繹的なプロセスではなく、最初の図形を超えて新たなものを生み出す創造的プロセスである (Hass 2008 : 151)。

(2) 証明は世界の中で身体化され、特定のパースペクティブに拘束された主体を前提としており、証明に必要とされる〈上下〉、〈左右〉、〈～の中〉、〈～の間〉といった意味は身体経験に由来している (Hass 2008 : 152)。

(3) 証明は「論証的価値 (demonstrative value)」、すなわち「必然性の力 (force of necessity)」を持つ (Hass 2008 : 153-154)。証明が実行された後は、他の意識にも反復可能であり、もはや証明されたものは、以前からずっと真理であったという必然性の回顧的感情をもたらす。

⁵ ランデスは、このパラドックスがヴァルデンフェルスの言うような沈黙から言葉へと翻訳する技術的な困難さではなく、実存の構造そのもののパラドックスであると主張する (Landes 2013 : 17)。もっとも、ここで挙げられている四つの概念が有用なものであることは認めている。

の箇所である。

それゆえ言語表現 (parole) は所与の意味を担った語と手持ちの諸意義とによってある志向に追いつきこれを表現しようとする作業なのであるが、この志向が表現手段としての語の意味を原理的に超出し、これを変容し、結局はみずからこれを定めるといった事情にあるので、言語表現はまさに逆説的な作業なのである。(PP: 449/637-638; Landes 2013: 12)

メルロ＝ポンティは「原初的な言葉」と「二次的な言葉」を区別しており、表現を行う能力を持っているのは「原初的な言葉」だけである (PP: 449/638; Landes 2013: 14)。「二次的な言葉」とは、すでに一つの言語として制度化されている言葉のことであり、それぞれの語には所与の意味が与えられている。しかしながら、「二次的な言葉」は過去の表現行為によって生み出されたものであり、それを生み出す働きをしているのが「原初的な言葉」なのである。もっとも、「表現」は全く自由に新たな意味を生み出すことはできない。「表現」は「負荷」となっている「二次的な言葉」を捉え直すことによって行われるのであり、表現を行う話者はすでに自由に使えるようになっており、他者と共有されている言語を用いて、それを変形させて新たな意味を生み出すのである。

1.3. 「表現のパラドックス」の事例

以上のように、ヴァルデンフェルスやランダスは表現を「表現のパラドックス」という特徴を持つ行為として捉えている。ここからさらに、ランダスは、メルロ＝ポンティにとってソシユールの影響を受ける前後でも表現という行為が持つ特徴は変化していないと主張している。以下では、ランダスの研究を再構成し、ランダスが「セザンヌの疑惑」(1945年)と「言語の現象学」(1951年)の両方に「表現のパラドックス」が見出していることを確認する。

(1) 「セザンヌの疑惑」(1945年)

ランダスは「セザンヌの疑惑」という小論において、メルロ＝ポンティの目的はセザンヌとレオナルド・ダ・ヴィンチという二人の芸術家の表現に関する以下のような解釈を批判することだと考えている⁶。

セザンヌというキャラクターにおいて、彼(メルロ＝ポンティ)が目的とするのは、セザンヌの過去あるいは彼の人格 (personality) の負荷にもかかわらず、いかにして彼の絵画が「純粋

⁶ 以下はLandes (2013) の「『セザンヌの疑惑』と存在するものを表現すること」(pp. 128-132)の議論を再構成している。

な反復」に還元されえないのかを示すことである。レオナルド・ダ・ヴィンチというキャラクターにおいて、メルロ＝ポンティが目的とするのは（フロイトの解釈に従って）、表現を芸術的天才の「純粋な創造」とする正反対の理解に抗することである。（Landes 2013：128）

セザンヌは「自分の絵画の新しさと思われたものは、眼の乱れの産物ではないか、自分の全生涯は、何か或る肉体の欠陥のうえに気づかれたのではないか」（SNS：13/19）という疑いを持っていた。このとき、セザンヌの絵画の意味は、彼の身体的特徴や人格といった外的な要因に決定されているに過ぎないということになってしまう。反対に、ヴァレリーによって描かれるレオナルド・ダ・ヴィンチは、「知的能力」であり、「精神のひと」とであるとされ、あらゆる拘束から自由に表現を行うことができる人物とされている。

要するに、ランダスによればメルロ＝ポンティが示したいのは、まさに「表現」とは、〈純粋な反復〉と〈純粋な創造〉、決定論と自由の間にある逆説的な行為であり、セザンヌの場合のように芸術家は彼の過去や人格といった外的な要因による負荷によって規定されるわけでもないが、ダ・ヴィンチのように負荷から全く自由に創造することもできないということである。

セザンヌのタッチには、彼が学んできた解剖学とデッサンが「テニスの試合におけるルールのようにそこに存在している」（SNS：22/21；Landes 2013：131）のであり、さらに付け加えれば、彼の過去や人生・人格すべてが「負荷」としてセザンヌのタッチにのしかかり、それを規定しているのである。どんな偉大な芸術家であっても、このような「負荷」から完全に自由になることはできない。しかし、「セザンヌのスタイルは、彼の過去、彼のテクニック、彼自身の明示的意図、あるいは絵画の歴史の軌跡（trajectory）における彼の役割に還元されることはできない」のであって、むしろ、彼のスタイルとはこのような「負荷」を「彼が生み出そうとする未来へ向かって捉え直す仕方」なのである（Landes 2013：128）。

(2) 「言語の現象学」（1951年）

ランダスによれば、上記のような「表現のパラドックス」をめぐる問いはソシュールの言語学の影響を受けた後においても変化してはいない⁷。確かにメルロ＝ポンティはソシュールの構造主義の影響を受け、言語を構造として捉えるようになったが、このときの言語の構造とは「準安定的なもの（metastable）」（Landes 2013：133）なのである。そして、このように構造を「動的平衡」あるいは「準安定的平衡」として捉えることと「表現」を「〈純粋な反復〉と〈純粋な創造〉の間にあるもの」として捉えることとの間には深い継続性がある（Landes 2013：133）。

⁷ 以下はLandes（2013）の「ソシュールと言語の現象学」（pp. 132-136）の議論を再構成している。

(ソシユールの構造言語学)は、メルロ＝ポンティを話すこと (speaking) と言語、話すことと沈黙の間の複雑な関係を探求することへと導いている。話すことの経験における言語学的構造のステータスを探求することで、メルロ＝ポンティは言語が準安定的なもの (metastable) として、動的平衡 (moving equilibrium) として存在していることを発見する。つまり、言語は各々の表現的言葉によって支えられ、推進させられ、作り直されるのだが、それらすべてを超越しており、逆説的にそれらすべてが応答するものなのである。(Landes 2013: 127, () 内引用者)

話者の表現行為は自分が属する言語共同体の「国語 (langue)」によって制約されており、自分が何かを語るためにはその言語共同体において用いられている表現手段 (形態論的・統辞論的・語彙論的用具) を用いる必要がある。しかし、話者に対する「負荷」として存在する国語は全く変化しない静態的なものではなく、「動的平衡」として捉えられなければならない。つまり、話者が表現を行うことによって国語は作り変えられていくのであり、その意味で、言語は完全に固定したものではなく「準安定的なもの」なのである。しかし、全く偶然に、無秩序に作り変えられていくわけではなく、「偶然のなかでの論理」(S: 142/138, Landes: 134) に従って、一旦崩壊した平衡状態は、また新たな平衡状態へと向かって進んで行くのである。もっとも、どのような平衡状態へと導かれていくかは、実際に表現が実現されるまでは、表現を行っている当の話者には分からない。それゆえに、「話者」と国語の関係は「逆説的 (paradoxical)」なのである。

2. 表現と意味

前節では、表現とは「表現のパラドックス」という特徴を持つ行為であるという視点からメルロ＝ポンティの表現論を論じている研究を見てきた。ここからは、表現と表現される意味や真理との関係からメルロ＝ポンティの表現論の変化を捉えようとする研究を見ていく。

以下では、まずソシユールの言語学の影響で語と意味の関係が変化したとするジェームズ・シュミット (Schmidt 1985) の研究から出発して (2.1)、歴史性を持つものとして意味を捉えるようになったとするバルバラス (Barbaras 1991, 1993) の研究を紹介する (2.2)。

2.1. 記号と意味

ここでは、シュミット (Schmidt 1985) による議論の整理を行う⁸。シュミットによれば、表現論において起こった変化とは、ソシユールの言語学の影響による語と意味との関係の変化である。すなわち、それまでは記号 (シニフィアン) と記号によって意味されるもの (シニフィエ) との関係

⁸ 以下はSchmidt (1985) の4章「言葉、表現、歴史の意味」における議論を再構成したものである。

は一対一で対応していると考えられていたのが、記号は他の記号との間の差異によってはじめて意味するようになると考えられるようになったというのである。

シュミットは、『知覚の現象学』において、メルロ＝ポンティが言葉を身振りの一種として捉えていたという(Schmidt 1985: 112-113)。このとき、「語が意味を持つ」ということは、身振りが何らかの対象を指し示すということと同様である。例えば、誰かが私に何らかの対象を指し示すとき、彼が指差している世界の中の対象をただちに理解するのであり、いかなる推論も「概念」や「心的イメージ」の媒介も必要としない。これと類似した仕方で、語もまた「概念」や「心的イメージ」を介在させることなく世界の中の対象を指し示している。そうであれば、指と指差される対象とが一対一で対応するように、語(シニフィアン)と意味されるもの(シニフィエ)との関係も一対一で対応すると考えられる。

もっとも、世界の中には多様な言語が存在しており、この点において身振りとは異なっているという反論も考えられるだろう。これに対して、シュミットは、メルロ＝ポンティは二つの仕方で答えているという(Schmidt 1985: 115)。一つは、一見すると、身振りとその意味の関係は必ずしも自然的なものではなく、身振りもまた文化によって異なっているというものである⁹。もう一つは、語と意味の関係は恣意的ではないというものである。語(シニフィアン)と意味されるもの(シニフィエ)との関係が恣意的に見えるのは、語の「概念的意味」の起源にある「情緒的意味」を考慮に入れていないからだ¹⁰。語の情緒的な次元においては、怒りの身振りと怒りが切り離せないのと同様に、語(シニフィアン)は意味されるもの(シニフィエ)から切り離せないのである。

ところが、ソシュールの影響によって、記号は他の記号との差異によって意味を持つと考えるようになることで、メルロ＝ポンティは「個別の記号を直接的な概念や対象へ向けて身振りをするものと見なす」(Schmidt 1985: 131)ことを否定するようになる。

われわれがソシュールから学んだのは、記号というものが、ひとつずつでは何ごとも意味せず、それらはいずれも、或る意味を表現するというよりも、その記号自体と、他の諸記号との間の、意味のへだたりを示しているということである。これら他の諸記号についても同様のことが言

⁹ 「人為的な記号は自然的なしるしには還元されない。なぜなら人間にはそもそも自然的なしるしなるものは存在しないのだから。そして、もし情緒にしてからが、われわれの「世界における(への)存在」の変容としてすでに、われわれの身体に含まれている機械的な装置に対して偶然のものであり、ほかならぬ言語の水準において頂点に達するところの、刺激と状況に形態を付与するあの同じ能力を、表すということが真実ならば、言語を情緒的表現に引き合わせても、言語のもつ独自の性質を損なうことにはならない。(PP: 229/312)

¹⁰ 「もし語の概念的・名辞的意味だけを考えるなら、なるほど語の形式は一語尾を除いて一恣意的であるように見える。しかし、例えば、詩において本質的であるところの、語の情緒的意味、前にわれわれが語の身振りの意味と呼んだものを考慮に入れるなら、もはやそうではなからう。この点に着目するならば、語や母音や音韻がそれぞれみな世界を謳う仕方であり、対象を表すべく定められており、それも素朴な擬音語理解が信じるように、客観的な類似ではなく、対象の情緒の本質を対象から引き出し、言葉のもとの意味においてこれを exprimer(表現する、原義搾りだす)しているからだということがわかるであろう。」(PP: 227-228/310)

いうわけだから、国語 (langue) は、名辞を持たぬさまざまな差異によってできているわけだ。もっと正確に言えば、言語における名辞とは、各名辞間にあらわれる差異によってのみ生み出されるのである。(S : 63/58 ; Schmidt 1985 : 130)

このようにメルロ＝ポンティは、意味は、記号間の差異によって生じると考えるようになるのだが、シュミットは、個別の記号とそれによって意味されるものが一対一で対応することが放棄されただけであり、語が身振りと同じように世界を指し示すというアイデア自体が放棄されたとは考えない。記号は直接的に指し示すのではなく、他の記号との差異によって、記号の弁別的働きを通して、世界を指し示すようになるのである (Schmidt 1985 : 131)。

2.2. 意味の歴史性

ここからは、意味の捉え方の変化についてのバルバラス (Barbaras 1991, chapter 3 and 4 ; Barbaras 1993) の議論を整理・再構成する。バルバラスは、ソシュールの言語学の影響で意味が歴史性を備えたものとして捉えられるようになることで、『知覚の現象学』において暗黙のうちに維持されていた主体と対象、主知主義と経験論、文化と自然といった二元論的な枠組みが乗り越えるきっかけとなったと考えている。

バルバラスは、メルロ＝ポンティがコレージュ・ド・フランスの教授への立候補に際して、マルシアル・ゲルー (Martial Guéroult) に送った報告書 (1952年) の中に、メルロ＝ポンティの哲学が抱えていた問題点を見出している。それまでの、知覚の研究は、「精神と真理の間の新たなタイプの関係」を明らかにしていた (PC II : 41-42 ; PM : II - III / 2)¹¹。しかし、「知覚された領野」の上に「認

¹¹ 「われわれは知覚世界を経験するなかで、精神と真理の間の新しいタイプの関係を発見したと思っている。知覚された物の明証性は、その具体的な姿に、その諸性質の組成そのものに、またセザンヌをして匂いまでも描くことができなければならぬと言わしめた、その感覚的諸性質間の等価性による。世界が真であったり存在したりするのは、われわれの存在の不可分性 (existence indivise) を前提にしてのことなのだ。物の感覚的諸性質は、その統一もその諸分節化も互に入りまじっているものであり、ということは、われわれが世界について、その総目録を作っても決して完結することのないある包括的観念をもっているし、われわれが世界のなかで、そこに透いて見えてくるようなある真理、われわれの精神がそれを捕捉するというよりはむしろわれわれを包みこむようなある真理を経験している、ということなのである。ところで、かりに今、知覚世界のさらに上に、普通に言われる意味での認識の領野、つまりそこで精神が真理をわがものにした、自分で対象を規定したりするというふうにして、ついにはわれわれの状況の特殊性から解放された普遍知に到達せんと望むような領野を考えるとすれば、知覚世界という存在次元は単なる見せかけの姿を呈し始め、そして純粹悟性が認識の新しい源泉となり、それに対比するとわれわれと世界との知覚的親縁性はまだ形の定まらぬ下絵にすぎない、ということになるのではないか。こうした問いに対して、われわれはまず真理についての理論によって、次に間主観性の理論によって答えざるをえない。われわれは、「セザンヌの懐疑」とか「小説と形而上学」、あるいは歴史哲学に関しては『ヒューマニズムとテロル』のような試論のなかでそうしたものに触れてはきたが、しかし今やわれわれはそれらの理論の哲学的基礎を完全な厳密さで仕上げなければならない。その真理論が、私がいま力を入れている二冊の本の目標なのである。」 (PC II : 41-42 ; PM : II - III / 2)

識の領野」あるいは「理念性の領野」があると暗黙のうち想定していたために、不完全さを伴う知覚世界の真理はいかなる不透明さもない普遍的な意味や真理の「不明瞭な下絵」に過ぎないということになってしまっていたのである (Barbaras 1993 : 62-63)¹²。

バルバラスは、『知覚の現象学』の問題点は、このような二元論的な枠組みを乗り越えることができている点にあると考えている。具体的には「表現としての身体と言葉」と題された章における「実存的意味」あるいは「情緒的意味」と「概念的意味」との区別である。前項で述べたように、『知覚の現象学』では、「概念的意味」の起源に「情緒的意味」があることを示して、言語も身振りの一種であることを明らかにしようとしていた。しかしながら、このような区別を用いたところで、「概念的意味」が「知覚世界」と区別された「理念性の領野」にあると想定しているのも、どのようにして「情緒的意味」から「概念的意味」が導き出されるのかを説明できていないのである。

そこで、バルバラスは、メルロ＝ポンティは言語の意味が「理念性の領野」にあるいかなる不透明さもない普遍的な本質ではなく、歴史性を持つことを示して、記号と意味、事実と本質、物質と精神といった区別そのものを乗り越えようとしていると考える。このときに影響を与えたのが記号に関するソシュールの言語学である。メルロ＝ポンティは、以下のような通俗的な記号と意味の関係についての考え方からスタートし、それが誤りであることを示す。

一般に、意味というものは、ちょうど、思考が、聴覚的ないし視覚的なさまざまな標識を超えているように、原理的に記号を超えたものと考えられている。—また、記号のそれぞれは、決定的なかたちで、それ自身の意味を持っているから、それ自身とわれわれとのあいだに、いかなる不透明さもすべりこませることはできず、そればかりか何かを考えさせることもできないのであって、(記号というものが戒告的な役割しかもっていないからであり、聴き手にたいして、彼の思考の中の何か或るひとつを考察しなければならぬ、と警告するからである)、まさしくこの点で、意味は記号に内在していると考えられている。(S : 68/62-63 ; Barbaras 1991 : 71)

私たちは、意味というものが記号に対して超越的であり、記号から独立して存在するものだと考えているが、同時に、記号からその意味をいかなる不透明さもなしに認識できることから、記号はそれ自身で意味を持っており、意味は記号に内在していると思っている¹³。

¹² 八幡 (2014) によれば、メルロ＝ポンティが問題視する古典的な真理概念とは以下の二つの特徴を持っている (八幡 2014 : 95)。一つは、「〈意義の一義性〉」であり、語の意味は一つの対象に縛りつけられているというものである。もう一つは、「新しいものの古いものへの内在」である。例えば、数学的真理は証明される以前から真なるものとして存在しており、「真理の貯蔵庫」の中にしまわれていたというものである。

¹³ 注12で示した八幡 (2014) の区別に従えば、記号と意味の透明な結びつきである「内在性」とは、「〈意味の一義性〉」と同様のものであり、記号とは別に、記号以前に意味が存在していたとする「超越性」とは「新しいものの古いものの内在」と同様のものと捉えられるだろう。

しかし、バルバラスによれば、記号についての意味の(1)超越性と(2)内在性は、いずれも不十分だとメルロ＝ポンティは考えているという。

(1) 超越性

まず、超越性の不十分さについてである。メルロ＝ポンティがソシュールから学んだのは、記号というものがそれ自体ではいかなる意味も持たず、意味というものは記号と記号との間の差異によって生じているということである(S: 63/58; Barbaras 1993: 72)。つまり、意味は記号よりも先に存在しているわけではないのであり、記号に自らの存在を負っていると考えなければならない。

(2) 内在性

また、内在性については、意味が記号にいかなる不透明さもなく内在しているとすれば、新たな表現を生むという言語表現の創造性を説明することができない。そこで、メルロ＝ポンティは、ソシュールがシステムとしての言語(langue)と表現作用としての言葉(parole)を区別していることに注目する(Barbaras 1991:76)。確かに、ある国語(langue)の中に生きている人々にとっては、記号と意味の間にはいかなる不透明性もないように思われるが、意味と記号の間の安定した関係は、表現作用(parole)の結果でしかない。私たちはすでに意味が制度化されている世界に生きており、手持ちの表現手段を用いて意味を表すことができるのだが、なぜそうなっているのかと言えば、私たちの表現作用によって意味が制度化されたからである。バルバラスは「意味はその歴史性の次元によって特徴づけられなければならない」(Barbaras 1993: 73)と述べているが、表現によって表現された意味というものは、いかなる不透明さも含まないような純粹な意味あるいは本質ではなく、歴史的に制度化されたものに過ぎず、後続する表現作用によって新たな意味へと作り変えられていく可能が残されている(Barbaras 1991: 79-80)。だからこそ、表現は未来へと開かれており、表現が完結するということはないのである(Barbaras 1993: 73)。

したがって、言語の意味であっても、その存在は記号という物質的なもの依存しており、歴史性を持っている。意味は「知覚された世界の沈黙」(Barbaras1993: 80)と切り離され「理念性の領野」

に鎮座しているものではないのである¹⁴。

おわりに

以上のように、一見すると対立しているようにバルバラスとランダスの違いは、表現論を考察する視点の違いに起因していることが分かる。バルバラスは、表現を表現される意味という点に焦点を当て論じており、そこに変化があったと考えている。これに対して、ランダスはより広い視点で、表現という行為が持つ構造を明らかにし、それがメルロ＝ポンティの表現論の中に一貫して見出されると主張している。このときに、バルバラスが言うように意味の捉え方に変化があったとしても、表現論のもつ構造は変化していないという主張は成り立つはずである。

結論としては、先行研究を比較検討する限りメルロ＝ポンティの表現論には、単純に断絶があるとも継続があるとも言うことはできない。表現論は表現行為として見たときには、そこには一貫した特徴を見出すことができるが、表現と表現される意味や真理に関する議論は大きく変化しており、ある種の断絶がある。そうであれば、メルロ＝ポンティの表現論をこのようなものとして捉えたときに、メルロ＝ポンティの哲学の発展をどのように解釈できるのかという問いに対する答えを提示することが今後の課題となるだろう。

<参考文献>

※引用は邦訳がある場合には、邦訳に拠ったが必要によって適宜変更を加えている。頁数は原著／邦訳の順で示す。

●メルロ＝ポンティ

PP: Merleau-Ponty, M. (1945). *Phénoménologie de la perception*. Paris: Gallimard. (中島盛夫訳、『知覚の現象学』, 法政大学出版局, 1982)

SNS: Merleau-Ponty, M. (1966). *Sens et non-sens*. Paris: Gallimard. 1996. (滝浦静雄, 栗津則雄, 木田元, 海老坂武訳, 『意味と無意味』, みすず書房, 1983年)

PM: Merleau-Ponty, M. (1969). *La prose du monde*. Paris: Gallimard. (滝浦静雄・木田元訳, 『世界の散文』, みすず書房, 1979)

¹⁴ ジェイムズ・エディ (Edie 1976) は、表現や言葉と対比されていた「沈黙」という概念もまた二つの意味で拡大されているという。一つは、「沈黙」は言語表現あるいは言葉 (parole) を可能にする国語 (langue) としても捉えられるようになったということである (Edie 1976: 102-103)。したがって、「沈黙」は一つの国語として構造化されており、過去に行われた表現によって創出されたものである。また、それは新たな表現を可能にするものでありながら、その表現によって作り変えられていくものでもある。もう一つは、『見えるものと見えないもの』では、「沈黙」が「見えないもの」として捉えられているという点である (Edie 1976: 104-107)。メルロ＝ポンティは、知覚もまた言語と同じように記号の間の差異によって意味が生み出されたと考えており、知覚も国語という「沈黙」と同じような構造を持っている。それらが「見えないもの」と呼ばれているのである。

PC II : Merleau-Ponty, M. (2000). *Parcours deux, 1951-1961*. Lagrasse : Verdier.

S : Merleau-Ponty, M. (1952). *Signes < Folio Essais >*. Paris : Gallimard. 2001. (竹内芳郎, 海老坂武, 栗津則雄, 木田元, 滝浦静雄訳, 『シーニュ I』, みすず書房, 1969年)

VI : Merleau-Ponty, M. (1964). *Le visible et l'invisible*. Paris : Gallimard. (滝浦静雄・木田元訳, 『見えるものと見えないもの』, みすず書房, 1989)

●外国語文献

Adams, H.(2001). Merleau-Ponty and the Advent of Meaning: From Consummate Reciprocity to Ambiguous Reversibility. *Continental Philosophy Review*, 34, (pp. 203-224).

——. (2008). Expression, In R. Diprose and J. Reynolds (Ed.), *Merleau-Ponty: Key concepts*. (pp. 152-162), London: Routledge, 2014.

Barbaras, R.(1991). *De l'être du phénomène: Sur l'ontologie de Merleau-Ponty*. Grenoble : J. Million.

一.(1993). De la parole à l'Être: Le problème de l'expression come vide d'accès à l'ontologie. In F. Heidsick (Ed.), *Merleau-Ponty: Le philosophie et son langage* (pp. 61-81).

Edie, J.(1976). *Speaking and meaning: The phenomenology of langage*. Bloomington: Indiana University Press.

Hass, L.(2008). *Merleau-Ponty's philosophy*. Bloomington: Indian University Press.

Landes, D. A.(2013). *Merleau-Ponty and the Paradoxes of Expression*. London: Bloomsbury Academic.

Morris, D.(2004). *The sense of space*. New York : SUNY press.

Schmidt, J.(1985). *Maurice Merleau-Ponty: Between phenomenology and structuralism*. London: Macmillan.

Waldenfels, B.(1998). Le paradoxe de l'expression chez Merleau-Ponty. In R. Barbaras (Ed.) *Merleau-Ponty, Notes de cours sur l'origine de la géométrie de Husserl, suivi de Recherches sur la phénoménologie de Merleau-Ponty* (pp. 331-348), Paris: PUF. (「メルロ＝ポンティにおける表現のパラドクス」, 本郷均訳, 『フッサール『幾何学の起源』講義』所収, 加賀野井秀一, 伊藤泰雄, 本郷均訳, 法政大学出版局, 2005年, pp. 447-469)

●邦語文献

末次弘 (1999). 『表現としての身体—メルロ＝ポンティ哲学研究』, 春秋社.

円谷裕二 (2014). 『知覚・言語・存在—メルロ＝ポンティ哲学との対話』, 九州大学出版会.

八幡恵一 (2014). 「真理と表現：メルロ＝ポンティ『世界の散文』における真理の問題」, 『年報地域文化研究』, 17号 (pp. 92-113).